

# 1 都内養鶏場における飼養衛生管理基準の指導と改善事例

○内匠 夏奈子

## 要約

都では、100羽以上の養鶏場に対して飼養衛生管理基準の立ち入り指導を行っている。サルモネラ陽性農場において清浄化対策を強化するため飼養衛生管理基準の項目を絞り重点的に指導したところ、複数農場で改善がみられた。A農場ではネズミが多数確認されており、対策に苦慮していた。そこで、東京都ペストコントロール協会と連携し、センサーカメラによるネズミの生息状況の確認や、粘着シート及び殺鼠剤の設置方法に関する指導を実施した。その結果、農場主がベイトボックス（毒餌容器）を自作するなど、ネズミ対策に積極的に取り組むようになった。また、鶏舎の消毒方法を見直し、石灰乳塗布等を新たに開始した。B農場では、鶏舎ごとの手指消毒及び靴の交換が未実施であった。指導後は全鶏舎で手指消毒を、育雛舎で靴の交換を実施するようになったが、成鶏舎は未だ靴の交換ができていないため、今後も指導していく。C農場では獣害が発生しており、センサーカメラにより野鳥、ネズミの侵入のほか、鶏舎周囲にタヌキが確認された。鶏舎に穴が確認されたため塞ぐよう指導し修繕を行った。こうした現地指導に加え、鶏舎の消毒方法及びネズミの対策方法について資料を作成し都内養鶏場に配布した。ネズミ対策の資料にはセンサーカメラで撮影した動画のURLを掲載し、ネズミの行動について解説した。今後も各農場に応じたきめ細やかな指導を実施していく。

都では、100羽以上の養鶏場に年2回立ち入りし、飼養衛生管理基準の指導を実施している。今回、サルモネラ陽性農場において、サルモネラの清浄化対策強化のため、飼養衛生管理基準の項目を絞り重点的に指導を実施したところ、複数農場で改善が認められたため、その事例について報告する。

### A農場の事例

A農場ではネズミが多数確認されており、農場主が対策に苦慮していた。そこで、東京都ペストコントロール協会（以下、「PCO」という。）と連携し、A農場でのネズミ対策を実施することにした。まず、PCOと同行し鶏舎内の確認を行ったところ、換気扇内にネズミの巣や、鶏舎内外にネズミが出入り可能な穴が多数確認された。鶏舎確認後、センサーカメラを設置し、ネズミの生息状況を確認した。動画では多数のネズミが確認され、特に夜間に活発に行動していた。

ニップルや水受けから飲水する行動や、自動給餌機に出入りしている様子が撮影され、ネズミによって餌や水、ケージが汚染される可能性が考えられた。ネズミの生息状況確認後、PCOも同行し、農場主に対してネズミの対策方法を指導した。粘着シート及び殺鼠剤による対策方法を紹介した。粘着シートの設置場所や設置枚数、殺鼠剤の設置場所、設置方法、混ぜる無毒餌の種類など、具体的な手順を指導した。ベイトボックス（毒餌容器）を利用した殺鼠剤の設置方法も紹介し、実際にベイトボックスを貸与し試用してもらった。指導から4か月後、PCOも同行し、農場主にネズミ対策の実施状況について現状確認を行った。農場主からは、体感としてネズミが減少した気がする、ベイトボックスの利用により殺鼠剤の喫食がよくなった、などの意見があった。また、既製品のベイトボックスは値段が高いため、市販の工具箱を改造して自作のベイトボックスを作成していた。工具

箱の左右にネズミが通れる穴を開け、付属の仕切りを削って中に殺鼠剤を置くスペースを作成していた(図1)。自作のベイトボックスでも、殺鼠剤の喫食を確認したとのことであった。PCOからは、ネズミの根絶は非常に難しく、数を増やさないことが重要なので、現在の対策を引き続き実施してほしいとの助言があった。今後も定期的に立ち入りし、ネズミの対策状況について確認していく。



図1 自作のベイトボックス

ネズミ対策のほか、鶏舎の消毒方法についても指導を行った。これまではオールアウト後に逆性石鹼を散布するのみであったが、より効果のある消毒方法について指導した。その結果、オールアウト後の床への石灰乳塗布、取り外しの可能な糞受けやエサ入れなどの浸漬消毒、ケージへの発泡消毒、逆性石鹼への水酸化カルシウムの添加について、新たに取り組むようになった。しかし、これらの消毒は現在育雛舎のみでしか実施できていないため、今後、他の鶏舎での実施を指導していく。

### B 農場の事例

B 農場では、鶏舎ごとの手指消毒、靴の交換が未実施であった。農場主に対し、鶏舎内への病原体侵入防止の意義について丁寧に説明したところ、鶏舎ごとの手指消毒、靴の交換を実施するようになった。ただし、成鶏舎では立ち入る従業員数が多いことや、靴の置き場がないことから、靴の交換が実施できていないため、今後も継続して指導を行っていく。また、鶏舎の消毒方法についても確認を行った。消毒薬散布用の高圧洗浄機の故障により、適切な消毒

薬散布ができていないおそれがあったため、消毒薬の調整部分の詰まりの除去や、ネズミに齧られた加温用のコードの修理を行った。その結果、適切な濃度及び温度での消毒薬散布が可能になった。また、発泡消毒が可能な高圧洗浄機を新たに購入し、ケージの消毒に利用するようになった。

### C 農場の事例

C 農場では鶏舎内での獣害が発生していた。そこで、野生動物の侵入状況について確認するため、センサーカメラを設置した。その結果、獣害の様子は撮影できなかったが、鶏舎内にスズメ、ネズミの侵入がみられたほか、鶏舎内には侵入していなかったが、タヌキが鶏舎前で確認された(図2)。

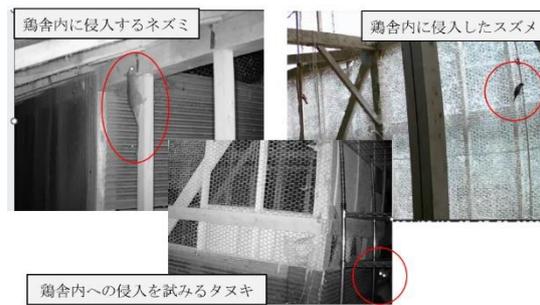


図2 C農場で確認された野生動物

鶏舎を点検したところ、鶏舎の壁の隙間やドアの隙間といった野生動物の侵入が可能な隙間や、防鳥ネットの穴が認められたため、修繕を指導した(図3)。



図3 C農場の鶏舎の隙間等

### 普及推進資料の作成

鶏舎の消毒方法及びネズミの対策方法

について普及啓発するための資料を作成し、100羽以上の養鶏場全戸に配布した。センサーカメラで撮影した動画を活用して、鶏舎内でのネズミの行動の解説動画を作成し、動画のURLとQRコードをネズミ対策資料の紙面に掲載した。また、優良事例として、市販の工具箱を活用したバイトボックスの自作方法についても掲載した(図4)。対策資料をみた農家からは、ネズミの動画をみて自動給餌機のネズミ対策を検討したいと思った、といった意見があり、ネズミ対策に関する意識向上が認められた。



図4 普及推進資料

### 総括

サルモネラの清浄化を目標にしたことで、農家の飼養衛生管理基準の遵守に対する意識が向上したことから、農場にとっての明確な目標の設定が非常に重要である。そのうえで、各農場の状況に応じたきめ細やかな指導を実施したことで、飼養衛生管理基準の改善を達成することができた。しかし、未だ不遵守の項目もあるため、継続した指導が必要である。また、今回得られた優良事例は他の農場にも共有し、指導に活用していく。今後も飼養衛生管理基準の指導を実施し、都内養鶏場の衛生レベルの向上を目指す。